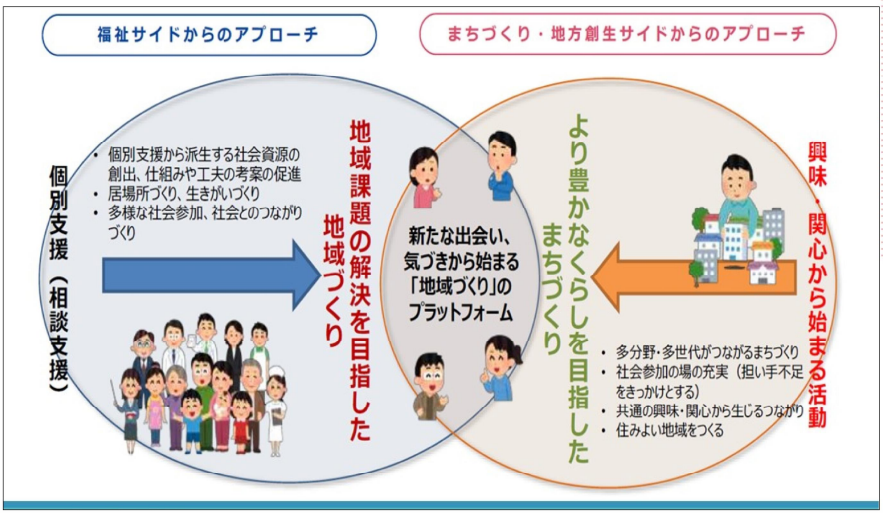
懐かしい未来新聞

発行：甲賀市
地域共生社会推進課
連絡先 内線1356
0748-69-2155

〈地域の困りごと〉と〈興味・関心〉
出会いのなれそめはあらゆるところに

社会的孤立を防ぐには、一人ひとりが地域社会とのかかわり方を自らで選び、役割を見出せるような接点を用意していくことが大切です。
新たな出会い、気づきから始まる「地域づくり（まちづくり）」のプラットフォームについて考えてみましょう。



本号の紙面
★トピックス
福祉とまちづくりからのアプローチ
★話題
厚労省視察受け入れ
★お知らせ
・閉庁二時間前カフェ
・みんなでe-こうか
★重層物語

対象者への支援は、行政の窓口から始まるとは、限りません。相談窓口に直接出向けない人ほど、複合化複雑化した悩みを抱えておられる人もいます。
一方、地域の中には、人とのかかわりが苦手でも「これなら好きかも」「ちょっと興味あるな」と思っう人もおられます。誰かが横にいて、その得意なこと、興味関心を持つ話を通じて抱える悩みを聞き、さりなげなく相談に向けて背中を押してあげることもあるでしょう。地域住民同士の緩やかな見守り・よりそいの中で生まれることもあるでしょう。
福祉の場所だけにとどまらず、民間企業、NPO団体、または小さな集まりの好き寄りやSNSグループなどを巻き込んだ地域づくり(まちづくり)からのアプローチが必要です。
地域づくり(まちづくり)は、行政が「つくる」というより、すでに地域の中にあるもの、地域の中で動き出しているものが多数あることを前提に、福祉分野の専門職だけではない多機関協働での取組みが求められています。
※クロス人材とは、地域の困りごとや生きづらさと、地域住民のもつ興味・関心を、意図的または偶然にクロスさせて、新たな地域活動が創出されるきっかけをつくる人材のことを言います。

厚生労働省　視察受け入れ
100あるうちの4つの取組みを紹介

社会・援護局地域福祉課
地域共生推進室

重層的支援体制整備は、福祉分野を中心としたテーマとしながらも、まちづくり部局との協働が欠かせません。
5月29日、厚労省から、米田室長、千葉係長、犬丸推進官、堀田聡子教授（慶応義塾大学）の視察を受け、市民活動センターまるーむにて、甲賀市が進める福祉部局とまちづくり部局協働の取組みについてプレゼン・意見交換・学習の場を得ましたので、報告します。

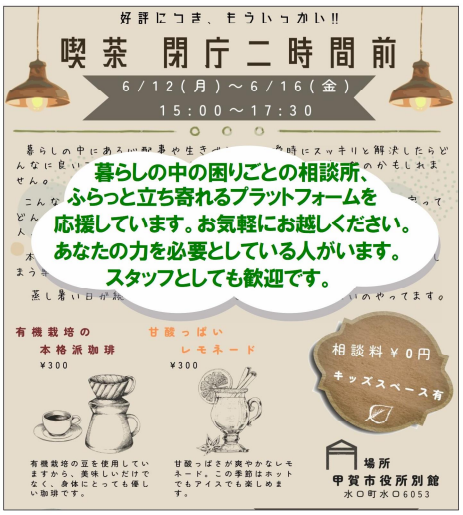
厚労省　米田室長によるコメントの様子

取り組みプレゼンメニュー

○福祉とまちづくり　市民活動推進課
○地域共生の取組み　地域共生社会推進課
○地域共生にかかる4つの取組み紹介
①「ばあちゃんち」　居場所の創出
②「人福祉・動物福祉協働会議」　市民協働
③「みんなでe-こうか」　クロス人材育成
④「年の暮れの夕暮れに」　困窮支援
○質疑・意見交換会

市役所職員だけでなく、社協、法人職員等関係者25名が集まりました。
意見交換では、重層的支援体制の制度にこだわらず、すでに市民や民間と協働の仕組みができていること、ゼロ予算でもやっていることへ好評価をいただきました。
質問では、ひとりのばあちゃんの「やってみたい・・」相談から始まったプラットフォームづくり〝ばあちゃんち〟に対し「どのように伴走支援をしたのか」等関心が集まりました。
終始和やかな雰囲気で、自らを「属人的な仲間たち」と名乗るメンバーに視察団からは「他の自治体では見られない元気なチームワーク」「厚労省に持ち帰ります」とエールが送られていました。

お知らせ



参加で応援
あなたもクロス人材に

みんなでe-こうか　イノベーションサロン
日時:7月19日(水)　19:00～21:30
場所:碧水ホール
内容:福祉・保健・教育・医療等から4つのテーマをワールド・カフェ方式で誰もが参加でき、学び合う場所です。
地域共生社会推進課は、市民協働提案制度で、〝みんなでe-こうか〟とパートナーです。
詳しくは、追って発信します。

うまくいき過ぎた重層物語　SEASON２

今回は『あなたもわたしもクロス人材』と題して重層物語をお届けします。

○黒須 重子（くろす しげこ）…48歳
２年前から地域市民センターで勤務する甲賀市職員。町内に顔見知りが多く、住民にとって話しかけやすい存在です。最近の楽しみは、週末に通い始めた珈琲教室です。

○天野さん…　72歳
妻が一昨年に亡くなり、自営の看板屋をたたんでしまいました。元来、人付き合いが得意ではなく地域の集まりにも顔を出しません。民生委員に「閉じこもってはいけない」と言われ、近所にある地域市民センターに顔を出しています。

○青（そら）くん…　8歳
小学二年生になってから、授業中に落ち着いて座っていられず、友達とのトラブルも増えました。朝になるとお腹が痛くなって学校に行けない日が続いています。地域市民センターの相談室でママと一緒に心理士との面談が始まりました。

○香織…　29歳
青くんのママ。四年前に離婚し、市営住宅で青くんと暮らしています。学校に行かない青くんについて、「勉強についていけなかったらどうしよう」と、そればかりが気になります。また、職場の上司と折り合いが悪く、仕事を辞めようかと悩んでもいます。

○邦子…　54歳
週末の珈琲教室で重子と知り合って意気投合し、「いつか一緒に喫茶店をやろう」なんて話もしています。
しかし、子どもたちが社会人となり子育てがひと段落したところに、一人暮らしの実母が認知症と診断されて、次は介護生活かと気落ちしています。

今日も、生真面目な天野さんは、革靴とジャケット姿で市民センターにやってきて、ロビーにあるソファーに腰を下ろし広報紙を読んでいます。重子が話しかけても、遠慮がちに「おおきにな」と言うだけです。以前には、地域にあるボランティア活動を紹介したこともありますが、「なんもでけへんから」と、それ以上に話は進みませんでした。

その日の午前十時過ぎ。「勝手にしろや！」大きな声に驚いて見ると、青くんがロビーのソファーでしょんぼりと座っています。駆け寄った重子が香織に事情を問うと、昨晩から準備して面談に臨んだのに、土壇場になって青くんが、「相談室に入らない」とごねたため怒鳴ってしまったとのことです。香織は、心理士から「ママだけでもいいよ」と諭され、「計算ドリルやっときや」と言い残して相談室に入っていきました。面談の間、重子は青くんの隣に座って待つことにしました。

5分程して、「黒須補佐、来客ですがどうしましょう？」重子は部下に呼ばれ、とっさに「天野さんお願い、青くんみてて」と言ってその場を離れました。重子は来客対応をしながらも二人の様子を気にしていました。すると、天野さんが青くんの計算ドリルを覗き込みながら、何やら会話をしている様子でした。

心理士との面談が終わり、香織に強く手を引かれた青くんは、くるっと振り向き天野さんに手を振って帰っていきました。半時間ほどして天野さんが帰る際に、重子は近づいて行き、「今日は本当に助かりました」とお礼を言いました。天野さんは、「あの子は絵がじょうずやねんで」とつぶやいて帰っていきました。

それ以来、天野さんと青くんがロビーで過ごすことが何度かありました。二人が過ごすロビーは、いつも安心感を湛えています。重子は、評価にさらされたり、点数をつけられることもなく、そのままで居られる空間なんだと感じました。同時に、「地域にこんな場所があればいいな」とも思いました。

「今日、天野さんおらんの？」
面談のない日に香織が突然やって来て、重子に話しかけてきました。聞けば、青くんがどうしても天野さんに見てほしい絵があるから、いつセンターに来るかを聞いてもらえないかという事でした。それと、絵を見せるだけでは味気ないので、お菓子を用意してロビーで食べてもよいかという相談でした。
「最初は変なおじいやと思ってたんけど、青と天野さんって、何か合うねん」と香織が嬉しそうに話す様子をみて、重子は、何とかしたいと思い、「分かった。また返事するね」と言いました。

重子は、人付き合いが苦手で孤立しがちな天野さんや不登校の青くんの生きづらさは、決してひとりの困りごとではなくて地域の課題だと感じていました。そこで、ロビーの有効活用を含めて、関係者が集まって話し合ってみてはどうかと考えました。もちろん、話し合う前に、天野さんに説明して承諾を得ることを忘れませんでしたし、珈琲教室の仲間である邦子が、「すき間時間で喫茶店ができればなあ…」と話していたことも思い出しました。

開催された重層的支援会議には、センターの職員、民生委員、地域共生社会推進課、地域包括支援センター、生活支援課、管財課、市民活動推進課、学校教育課、社会福祉協議会、担当の心理士（発達支援課）、スクールソーシャルワーカー、そして香織も参加しました。

七月号へつづく

（文責　中井浩喜）

今や他市町も注目の重層物語。
0市は、前号の原作を元に紙芝居仕立てのパワポを制作されたとか。